

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
山口 きみ (旧姓 原)	女 性	1 8 歳	豊川市 (一鉄田)

「空襲後に見た地獄のような光景」

私は新城高等女学校を卒業後、専攻科におりましたが、父親の勧めもあり中途でしたが昭和18年7月、豊川海軍工廠に入廠しました。寄宿舎に入り、会計部指揮兵器工事費係に勤務しました。場所は鉄道駅付近の北東門近くで、鉄鋼倉庫の中にある事務所でした。日増しに戦況がきびしくなりましたが、昭和19年になると学徒動員が始まり、多くの学校から生徒さんがやってきました。私と同じ職場には、豊橋市立女子商業学校から永田久子さんたち(14・15歳)が入廠されました。そして、運命の20年8月7日の大空襲を迎えたのです。

10時を過ぎたころだったでしょうか。空襲警報が発令され、退避命令により防空壕に退避しました。防空壕は倉庫の前に三つあり、私は一番東の防空壕に入り、永田さんは中央の防空壕に入りました。壕に飛び込むと息つく間もなく空襲が始まりました。「ゴー、ゴー」というB29の爆音、「ヒュー、ドカン!」という爆弾の炸裂するすさまじい音と地ひびきが続きました。すぐ近くに落ちたようで、体が吹き飛ばすような衝撃があり、もう生きた心地はありませんでした。耳を手でふさいで、じっと耐えながら祈っていましたが、私はここで死ぬんだと覚悟しました。恐ろしく長く感じる時間が過ぎ、空襲がやみました。誰かの指示があったのか分かりませんが、私たち女子は北東門から廠外に逃げ出しました。

三蔵子にあるお寺に着き、そこで同じ職場で仲良しだった城所さんと二人でくんでいました。すると、近くの方なのか分かりませんが男の人が家族を捜しながら来て、「あんたたち、ご飯は食べた?」と優しく声をかけてくれました。アルミニウムの大きな弁当箱に麦飯が詰められ、上には梅干しがのっていました。その麦飯を城所さんと二人で分けて食べました。その時の弁当の味と人情の温かさは今も忘れることができません。食べ終わって、ようやく落ち着きを取り戻し事務所に帰りました。

変わり果てた工廠の様子に目を疑いました。私たちがいた防空壕



爆撃後の正門付近

桜ヶ丘ミュージアム提供

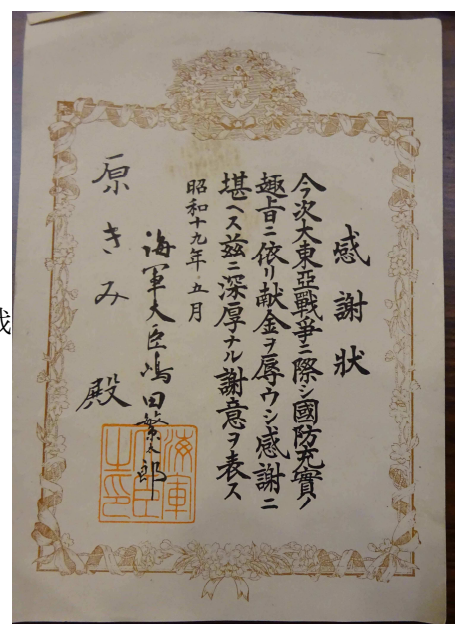
の横にあった二つの防空壕は直撃を受け、目を覆うばかりの惨状でした。散り散りになっていた生き残った人たちが三々五々集まってきましたが、今まで仕事を共にした幾多の人の姿もなく、ただぼう然として防空壕のまわりに立ちつくしておりました。すると、中央の防空壕だったあたりからうめき声が聞こえてきました。同じ事務所の男の方が、「生きているかもしれない、掘ってみるぞ!」と言われ、私たちもまさかと思いながら掘り返してみますと、中より亡くなられた方々と共に全身打撲を受け、土まみれになった永田さんともう一人の豊橋女子商業の女子生徒が二人助け出されました。あの方々は全滅でした。時間ははっきり記憶しておりませんが、数時間経っていたように思います。私はそのとき、永田さんの生への執着、精神力の強靱さに感動しました。

すぐに工 廠 内に設置された仮の収容所に運ばれました。その時、係官の海軍少尉が、「あなたは年上だから、一晚世話をしやってくれないか。」と頼まれ、私がお世話させていただくことになりました。その時に、同じ職場にいた女学校の生徒さんたちや同じ寮にいた子も大勢亡くなったことが分かりました。金沢の子や一畝田で小学校の同級生だった小柳津さんも亡くなっていました。

その日だったか、翌日だったかははっきり覚えていませんが、他に生きている人がいないか、上の人たちといっしょに探し歩きました。死体の間を縫うようにして歩きました。他の防空壕も見回りました。その悲惨な光景は今も目に焼きついています。トタンの上に載せられて焼けただれた人、目や口が分からないほど顔がふくれあがった人、ちぎれた手足など、遺体が至る所にありました。暑い日だったので血の臭いなのか死臭なのか、鼻をつく強烈な臭いがしました。地獄のような恐ろしさで、体が震えました。

空襲があったことは遠くからも分かったようで、その日のうちに父親が私を心配して様子を見に来てくれていました。私を見つけることはできなかったようですが、他の一畝田の人から私が無事だったことを確認できたようで、安心して戻っていったと後で聞きました。家からでも爆撃のすさまじさが見えたそうなので、父や母はさぞ心配をしたんだろうなと思いました。

一瞬にして多くの命を奪った戦争の悲惨さ、戦争を起こしてしまった愚かさを、決して忘れてはならないと思います。私たちの戦争時代の体験が、平和に役立つことを願っています。



原きみさん所有の感謝状